

隠蔽された「小田原式」

—「小田原の土器」の復権と「小田原式」研究の展望—

鈴木正博

1. 序 – 「藤村新一事件」と「小田原式」隠蔽は同根！ –
2. 「小田原式」隠蔽の形成と「小田原の土器」の行方
3. 「小田原の土器」の復権による新たなる「小田原式」隠蔽の展開
4. 「小田原の土器」研究法と「小田原式」の復権
5. 結語 —「小田原式」研究の今日的意義—

1. 序 – 「藤村新一事件」と「小田原式」隠蔽は同根！ –

尚記憶に新しい「藤村新一事件」は、極論すれば皮肉にも戦後における似非考古学の形成過程を如実に露呈した点が戦後の主導者にとって悲劇的致命傷なのであり、「こうした学界形成は捏造者一人の責任ではあるまい。それは演劇における、道化役（捏造者）・主役（取り巻きの研究者）・演出家（意義付けを担う研究者）・プロデューサ（前期旧石器のオピニオン・リーダ）・評論家（学界の権威者）のそれぞれに責任があり、もたれ合った学界の構造的な汚染なのである」（岡本東三2003）と社会的な役割分担のみは明らかとなったものの、実体不在にも拘らず摩訶不思議な組織的展開が進行したため、「藤村新一事件」の国民への背任意識は当事者達にとっては転嫁・回避という新たな捏造対象となり、何故か真摯な学徒のみが自己責任として歴史的な重荷を以後背負うことになった。

加えて「藤村新一事件」が悲惨なのは、犯罪的な物理的な捏造から学問的な捏造へと反映させるモラルハザードとしての展開プロセスそのものをも赤裸々に検証してしまった点であり、実はそれを為し得た点が日常茶飯事の縦割り行政的な広報活動であったという、学問的な倫理不在の構造実態もが露呈されてしまった点である。官学民による共謀共同正犯を決して疑わない理由は正に学問手続きの不在にあるのであって、その根は想像以上に深い（紅村弘2003）。

特に日本先史考古学では戦前の人類学先史学を基盤とした学史の重要性を理解せずに学史を捏造する風潮が顕著であり、最近は学生思想家よろしく人生観を「宙返り」させるときには、皆を喜ばせたい一心で驚くほどの幼稚な曲解を、初学者向きに意識的に誘導するものもいる（大塚達朗2000）。読み物としては面白く、最近はそれで良しとする風潮が蔓延っているが、山内清男氏の学説を意識的に捏造した行為だけは絶対に赦し難い。

このように戦後の日本考古学には、原因が犯罪的な捏造であろうが、正規な学問的な手続きであろうが、実体の無い摩訶不思議な組織形成プロセスによって、学問か否かの問題を不問に

してしまうような非科学的な考古学運用が一般化していたのである。これは最早「学問不在」と呼ばざるを得ない状況であるが、戦前にはミネルヴァ論争に代表されるように「土器型式」による先史考古学の方法が確立されており（山内清男1936 a・b）、科学的な学問成果が非科学的な捏造（具体的には純粋な子供の言い分をそのまま信じて学問的に検証する術を持ち得なかつた喜田貞吉氏の常識考古学）に打ち勝ってきたのである。

問題は戦後の何でもありの野放し文芸風潮であり（人生に夢や希望を与えるための便法に留めるべき知性が必要であったが、高度経済成長と共に感性依存に興じ過ぎ、歯止めが掛からなかつたところに捏造の温床を指摘しなければならないのであり）、戦前の学問に求められていたのは基盤の確立という、禁欲性かつ論理の熟練性を背景にした体系的な接近であり、それを達成したにも拘らず、戦後は解釈との間を埋める学問的基盤構築努力を惜しむために、人生観や感想を考古表現として押しつける風潮に価値観を求めて、戦前への反動形成が加速された。このような戦後の「学問不在」を目の当たりにすると、実は型式学不在などは可愛いレベルの悲観現象である。それ以上に不気味な村社会が形成されていた点に眞の反省が求められるべきであり、「考古学」から「(埋蔵)文化財学」への転換（即ち、学界から業界への恣意的転身）が正にそれを象徴しており、学問としての地域研究を蔑ろにし、情報戦略としての地域広報に組織的に特化した結果、「考古学栄えて考古学滅ぶ」（鈴木正博1997）と警告したとおりに捏造の温床が加速したのであった。

このような認識に立った時、南関東弥生式でも方法的に再検証を必要としている多くの問題が山積みしている（特に本稿では精製土器様式を中心とした議論する立場で、粗製土器様式は精製土器様式に準ずる位置付け（つまり、粗製土器様式は「土器型式」の内容を充実させる意義は認められるが、「土器型式」を規定する役割は認められない）であることだけは冒頭にて明記しておく必要がある）。私は西部弥生式全般への直接の関わりが尚薄く、その影響もあり、南関東では主に弥生式の成立から中期までを見直してきたが、ここ四半世紀にわたる継続性により、どうやら俗称「須和田式」までは「土器型式」研究における議論の基盤が再認識されてきたように思われる所以、本稿では南関東弥生式社会の転換点と推察される「小田原式」研究の意義を認識するための土台構築を目指して、「分類の標準」から観た「小田原の土器」研究法を確認し、一層の議論の活性化に貢献したいと思う。

そこで先ずは「小田原式」を隠蔽しようとする心の持ち方が、実は「藤村新一事件」発覚以前における疑義を抹殺してきた群集心理と極めて共通した意識であり、るべき学問的手続きを踏まえることなく特定の結論へと導いてきた経緯から確認しておく必要があろう。

2. 「小田原式」隠蔽の形成と「小田原の土器」の行方

「小田原式」理解には幾つかの立場があり、それらはそのまま弥生式研究の理念及び方法と

相同であり、しかも既に戦前に原型は決定されていた。そしてそこには遺蹟・遺物の理解から地方の理解に至るまで影響を及ぼす、方法の恐ろしいほどの違いが顕現していた（鈴木正博1999）のであり、南関東の研究者は山内清男氏が確立した基礎理論の学習を疎かにしているためか（伊丹徹1990）、先史考古学の方法に疎く、しかも意見の相違に立脚した今後の課題を螺旋上昇的に生成すること無く、人生前向き、学問後ろ向きを標榜し、業界談合よろしく仲間内のマニュアル整備（思考停止状態）に腐心しているように見える。必要なのは個々人の資質の発現促進であり、それを効果的に進めるには基本的な守→破→離の手続きを踏むべきと思量する。

「小田原式」の真相は後述するとして、特に最近の潮流は「小田原式」を「宮ノ台式」の中に吸収しようとする意見が圧倒的に多い。この見解は原型が「様式論」思考（小林行雄1939）にあり、関東地方の「土器型式」から除外した扱いに範を求める、やがて神澤勇一氏が関東地方の「土器型式」に戻すとともに「宮ノ台式」から除外した東京湾西部の独自性の扱いを弥生式全体の地域性の中で捉え直し、更には杉原莊介氏が土器群の持つ属性から「細別」（杉原莊介1936 a・1936 b）した小田原遺蹟出土土器群、特に著名な「小田原の土器」2個体を検証せずに一括してしまう立場（神澤勇一1968）に尽きる。

こうした動向にあって三宅島ボウタ遺蹟の調査（大塚初重1965）は特に精製土器様式の文様としては注目すべき成果をもたらしたのであるが、何故か杉原莊介氏の議論展開を重視した大塚初重氏の立場を端緒として多くは粗製土器様式のみを根拠とする、編年的位置を特定し得ない議論が展開されることになり、その悪しき発想は私の学生時代にも着実に影響を与えていた（星田亨二1976）。

そこで「土器型式」を特定する重要な「精製土器様式」の壺については、杉原莊介氏による最終的な見解を確認しておく必要がある。そこには極めて重要な分類概念が示されていたからである。即ち、「小田原前期」（杉原莊介1936 b）には「第二類土器」（杉原莊介1936 a）とした「器の内外面には多く丹が塗られる」「文様は所謂櫛目文」とともに、「第四類土器」とした「小田原出土の弥生式土器として最もよく知られているもの」2個体の「特異化せる櫛目文」（丹は塗られていない）の櫛目文二者が見事に分類され、最終的な見解としては「赤色の塗彩をほとんどおこなっていないのは、次期と比較して、また一つの特色としてよいであろう」と裁断されたのである（杉原莊介1968）。こうして「小田原前期」の「第二類土器」は自らの定義の変更により「小田原式」ではなく、「宮ノ台式」との明確な認識のみを示した（實際には変更手続きを明示しなかったので混乱の原因にもなっている）のであり、従って結果的に小田原遺蹟において「小田原式」を定義できる精製土器様式としては、「第四類土器」に型式学的な焦点が絞られるべきである。特に唐突に掲載された池辺町の「白岩式」系重弧文に接する時、その思いは一層強くなるばかりである。

「小田原式」制定の最終的な見解としてもう一つ重要な指摘がある。それは精製土器様式においても「須和田式土器の一部とをあわせたものである」との理解を示し、南加瀬貝塚の壺を

「小田原式」に含めた点である。このようにそれ以前の伝統からは形成されない「櫛描文系列」（施朱の風習が未発達）と、俗称「須和田式」の伝統を継承した「非櫛描文縄紋系列」の二者を特徴とする一群が「小田原式」を規定する壺の標準とされた点は、「宮ノ台式」の定義と比較する上で極めて重要な視点であった。

この結果、皮肉にも戦前に山内清男氏が『日本先史土器図譜』（山内清男1940）で提示した「分類の標準」のみが、漸く戦後に至り杉原莊介氏によっても根拠として重視されたことになる。これに大塚初重氏によって伊豆方面との系統関係が推定されたボウタ遺跡の磨消縄紋を含む各種文様が加われば、山内清男氏の「特に変った弥生式」（山内清男1940）展開は「宮ノ台式」成立に向けてかなりの精度で達成されたはずである。こうした経緯を学習してきた立場（鈴木正博1979b）に立つと、やはり山内清男氏の「小田原式」への拘り（杉山博久1996）には、後述するがその方法を再検証する意味も含めて是非とも注目し、接近する必要がある。

尚、杉原莊介氏は分類した土器群を再編成するアッセンブリジの特定法には意を払わず（「分類の標準」の重みは全く感じられず）、型式学的根拠が不明で直感に頼っていたかの方法に問題が顕在化しており、これは多くの研究者が粗製土器様式を例にとって批判している通りであるが、精製土器様式においては更に深刻である。小林行雄氏が山内清男氏の方法を水面下で勉強していたのに対して、杉原莊介氏は補助学払拭の立場と哲学への傾倒が災いして、住居址の発掘方法のように外部（例えば歴史学）に対して考古学の独自性を強調する場面では方法的な真摯さが窺えるが、先史考古学の内部における専門的かつ具体的な方法には何故か無頓着で、かつ想念重視の印象が拭えないのである。それでも私が「小田原式」に拘泥するのは方法の正規化を求めるためであり、後述したい。

山内清男・小林行雄・杉原莊介・神澤勇一諸氏の「小田原式」研究はこれ以降頓挫することになる。それは「宮ノ台式」研究者にとっては精製土器様式の「櫛描文系列」と粗製土器様式との関係が整理できず、加えてより古い俗称「須和田式」研究（杉原莊介1977）に編年の展望が見出せない状況を併せ持ってしまったからである。しかも、俗称「須和田式」の混乱はそれ以前に中村五郎氏が見事に収拾していた（中村五郎1972）にも拘らずの結末であり、この時点で杉原莊介氏の編年観は根底から疑われ崩れてしまい、本来の「土器型式」に再編成する動向が顕著となってきたのである（鈴木正博・鈴木加津子1980）。こうした反省とは無縁な状況として「宮ノ台式」研究が進められてきたことは、誠に不幸な停滞といわざるを得ない。

こうして杉原莊介氏の「小田原式」理解は俗称「須和田式」で披露した型式学不在の影響を受け、「土器型式」制定の主役である精製土器様式から、伴存関係によってしか判明しない粗製土器様式への依存が混沌を招いてしまったのである。関東地方における縄紋式の組織化が精製土器様式によって秩序化してきた人類史的意義を不問とし、何故縄紋式を成立基盤としているはずの弥生式に秩序を乱すような方法を導入したのであろうか。ここに杉原莊介氏の「様式論」に対する対抗意識が強く感じられるのであり、先史考古学とは科学的体系的に構築されて

きたものであるにも拘らず、局所最適化に邁進し、「様式論」に引きずられてるべき全体最適化を見失ってしまったのである。

さて、1970年代前半は中村五郎氏が小田原考古学研究会の活躍に刺激を与える目的で「野沢1式」を総論し、俗称「須和田式」の混乱を収拾した如く、先行研究の「小田原式」に対して地域研究として分類の検証が進められてきた堅実な実績があり（飯塚博和氏が何故か省略に従っている研究史でもあり（鈴木正博2001b））、本稿で明記しておきたい。

先ずは小田原遺蹟出土資料で「小田原式」より新しいとされた壺が拓本にて示された点（杉山博久1970a）は、「小田原式」との相違を検討する上で大いに参考になったものである。更に小田原市山ノ神遺蹟の土器群の分析に当たって「山ノ神遺跡出土の土器の示す特徴は複雑である」（杉山博久1970b）と纏めた点は重要であるが、惜しむらくは具体的な分析が粗製土器様式に集中し、精製土器様式の複雑さに到達しなかった点である。地域性という観点では駿河湾方面の資料と比較している点が注目されるが、先行研究である「相模湾沿岸地域の弥生式土器は、隣接する東海地方東部（駿河湾沿岸地域）の土器と比較すると、土器の組成、各器形における形状、文様等に差があり、（中略）独自の地域性を示している」（神澤勇一1968）という指摘を意識しての対応と思われる。

続いて検討されたのは山寄りの厚木市愛名鳥山遺蹟（杉山博久1974）で、最古の「宮ノ台式」期壺（「宮ノ台式愛名鳥山系列」（鈴木正博2001b）と命名）等興味深い資料が検出されている。杉山博久氏は山ノ神遺蹟での見解を踏襲しつつ、杉原莊介氏の方法に疑問を呈し、改めて神澤勇一氏の視点を確認した上で資料の再構成を推進した。特に「小田原式」については「その1形式の形式名を学史的な観点から小田原式としても良いと思う」として神澤勇一説に準拠することになった。

そこでこうした地域研究進展の重要性に鑑み、本稿では「宮ノ台式」に対して相模方面の地方差とする立場を「新説小田原式」と呼んでおく。勿論、問題が無かった訳ではない。特に精製土器様式については「文様は多様」としただけで分析を深めることはなかった。しかし、それでも特記すべきは、「本遺跡出土の土器の示す特徴は複雑である」との全体性の「特徴」について比較が行われた点である。それは小田原の諸遺蹟の「特徴」とは「共通する」、駿河湾沿岸地方の諸遺蹟の中に「類似した特徴をもつ資料を検出することができる」、そしてボウタ遺蹟は「きわめて類似した特徴を示している」という比較結果であり、準拠したアナログ根拠は明確である。蛇足ながら、精製土器様式を編年の根拠としない伝統は根強く、私よりも若手では大島慎一氏が継承することになった（大島慎一1983）。

1970年代は千葉県でも「小田原式」をめぐる議論が活発化するのであるが、その評価については飯塚博和氏の研究が目的を射ている（飯塚博和1993・1994）ので本稿では省略に従いたい。本章では小林行雄氏の「様式論」に端を発した似たもの雰囲気の寄せ集めから、相模方面の系統性が徐々に地域研究によって矯正されていったにも拘らず、編年不在、精製土器様式の型式

学不在のために、その後如何に本来あるべき姿が捏造されていったかを明らかにしたい。

1970年代の東京湾西部における「小田原式」研究は主として遺蹟における実態把握に努め、その特徴が一筋縄では行かない所までは明らかにし得たかに見えた。そしてその特徴を大枠として捉え、独自の地域性を構成する「土器型式」として「小田原式」を拡大解釈し、杉原莊介氏の趣旨であった「宮ノ台式」を生成する基盤としての年代的な理解は避けられてしまった。これは中期後半における「土器型式」の年代的な「細別」を否定し、地方的な「細別」に意義を求めた結果であるが、では、年代的な「細別」を推進する立場からはどのような評価が与えられたのであろうか。

1980年代はこれから述べるように「宮ノ台式」の「細別」研究と「小田原式」隠蔽が進行した時代であった（他方では俗称「須和田式」が本来の「土器型式」に再編成される伏流と「小田原式」の復権が着実に形成された時代でもあった（飯塚博和1982、鈴木正博1982・1984・1985、関義則1983））。

まずは何を描いても「鶴見川流域ドングリ云々」（鈴木正博1999）と一括した研究姿勢形成の基本認識から確認していく必要があるだろう。1980年、因縁（因縁とは神奈川県遺蹟発表会にて私が石井寛氏の発表に対して「小田原式」を質問した経緯があるからである）の折本西原遺蹟の報告が上梓された（石井寛1980）。私は「小田原式」を否定するにはそれだけの根拠があるものと理解して臨んだが、要するに石井寛氏に「小田原式」や俗称「須和田式」の知識が無かつただけで、杉原莊介氏の方法にのみ反動形成で拘った村社会的な拒絶理由であった（これは報告書に丁寧に記述されており、最終的には「こうした問題をかかえる須和田式以降の土器群に対しては、明確な型式概念規定を行わずに土器型式名を使用することは問題を複雑にする」のが理由であるが、どうやら石井寛氏の該期理解は「単純」でないと困るようである。このような考え方だから山内清男氏の方法や縄紋式社会へ接近ができないのである）。

その結果、「須和田式以降の中期土器群」と言葉上でのみ勝手な規定を行い、それらに該当する土器群の系統性を全く分析することなく、また折本西原遺蹟以外は新古の基準も議論せず、単純に縦に並べているだけである。1970年代後半、私は弥生式の「土器型式」が「複合」構造を有して実体化している点を明らかにしており（鈴木正博1979a）、しかも弥生式中期の東日本では「渦文系統論」を構築し、動的な交渉関係を導出していた（鈴木正博1978）のであり、石井寛氏の議論はあまりにも弥生式研究に近視眼で無知な結果であると判断された。このような低レベルの議論で学史的な「小田原式」が隠蔽されてしまうのであり、そしてそれで良しとする姿勢を「鶴見川流域ドングリ云々」なる表現で埋蔵文化財業界の振幅である「ドライ（業務志向）→ウェット（考古学志向）→ドライ（埋蔵文化財学汚染）」の到達点を象徴化し、「様式論」同様に先史考古学の方法以前の低レベルの状態にあり、先史考古学本来の基盤研究になつていないと結論したのであり、いつでもどこでも誰にでも明言して来た経緯がある。

さて、石井寛氏が採用した「須和田式」は「小田原式」のように「問題をかかえる」ことが

無いのであろうか。既に触れたとおり、1970年代の東部弥生式研究を学んでおれば、そのような認識は冗談も甚だしいのである。それを証明するかのようにその直後の栃木県出流原遺蹟（杉原莊介1981）の報告を皮切りとして、千葉県勢至久保遺蹟（飯塚博和1982）、神奈川県王子台遺蹟（関根孝夫1982、大島慎一1983）、埼玉県池上遺蹟（中島宏1982）・上敷免遺蹟（関義則1983）など多くの「問題をかかえている」実態が明らかになった（鈴木正博1982・1984・1985）のであり、単に型式学不在を証明したに過ぎなかったのである。

特に須和田遺蹟の俗称「須和田式」は「平沢式」や「出流原式」よりも新しく、本来的には「小田原式」に比定されるべきであるとした私の指摘と連動するかのように、石川日出志氏も「須和田遺蹟の「須和田式」は須和田系では最も新しい1群の1部をなしており、宮ノ台式（古）の幅の中に納まるとみられる」と裁断するに至った（石川日出志1986）。そして具体的な精製土器様式図版の指示と記述は『日本土器事典』の「須和田式土器」解説文（石川日出志1996a）で明らかとなった。

このように石井寛氏が「小田原式」を隠蔽すべきとした「複雑」な研究経緯の背景は、抛つて立つ方法の研鑽故であり、学問の発展が過去の正しい継承から形成される過程を知るものにとっては、隠蔽することは決して学問的な手続きではなく、単に個人的な趣味の問題に過ぎないことは明白であった。何故石井寛氏は先学に学ぶ姿勢を放棄したのであろうか。これが埋蔵文化財業界の悪しき風潮なのであり、学問とは単なる作業ではなく、学問の蓄積に対する正当な批判や継承であり、従って報告書作成業務の効率のみを目指してはいけないのである。

尚、石井寛氏に対する私の批判は「小田原式」研究の学史から学ぶ姿勢を無視する隠蔽態度だけにあるのではなく、折本西原遺蹟の土器群が精製土器様式を基準として構成された点には縄紋式研究者としての面目躍如があるものの、眞の批判は「この大別は土器の様相と流れに重点を置いて行なうもので、大まかな分割になる」とした点が「土器型式」の議論ではなく、多摩ニュータウン考古学に影響された悪しき作業分類因習（即ち、型式学ではなく、形態学に留まってしまった作業）であった点である。特に「こうした細分は土器の様相のみによる細分であり、背景となる社会論的な段階付けがなされていない」とした認識を知るとき、石井寛氏が縄紋式で組織化してきた「土器型式」を捨て、暗黙のうちに解釈を先行する「様式論」に従っていることが判明してしまうのである。

では、石川日出志氏は「小田原式」をどのように理解していたのであろうか。幸い石川日出志氏のご教示により『日本土器事典』の「小田原式土器」解説文（石川日出志1996b）が1987年-1988年提出の内容であることを知ったので、当時の認識が理解できることになった。それは「現在の知見によれば、杉原の小田原式は宮ノ台式直前～宮ノ台式中段階の例が殆どで」、「杉原の宮ノ台式は現在の宮ノ台式中～新段階に属す例がほとんどであった」というものであるが、問題は「現在の知見」や「現在の宮ノ台式」にあった。「須和田式」、「小田原式」、「宮ノ台式」はどれをとっても杉原莊介氏が定義し議論したものであるが、石川日出志氏によ

って「小田原式」は隠蔽され、「須和田式」は再構成され、「宮ノ台式」は拡大誇張された。

そこで気になるのは「宮ノ台式」の継承と拡大誇張であり、果たして「宮ノ台式」のみは問題が無いのであろうか。そして神澤勇一・杉山博久両氏の指摘は全く意味が無いのであろうか。つまり、石川日出志氏は神澤勇一・杉山博久両氏の「新説小田原式」に対しては石井寛氏を楯とし、「小田原式」を隠蔽することによって躊躇し、更に「須和田式」を再構成し、「宮ノ台式」を石井寛氏の精製土器様式基準に準拠しつつも東京湾東部にも目配せした「細別」を提示することによって、神澤勇一・杉山博久両氏の「新説小田原式」への批判としたのである。ここでの具体的な問題は「宮ノ台式直前」と「宮ノ台式」の定義であるが、前者は不明、後者には「須和田式」の一部と「小田原式」が組み込まれている点に注意するならば、杉原莊介氏による「須和田式」、「小田原式」、「宮ノ台式」の全ての内容が否定されたことに注意すべきであり、「宮ノ台式」のみを存続させる意味が不明・不可解である。やはり、石井寛氏同様に趣味的対応であり、学問的な手続きに則った対応とは思われない。

「土器型式」制定で重要なのは山内清男氏が明確にしたように精製土器様式を中心とした「分類の標準」による議論なのであるが、「宮ノ台式」「古段階」として指摘した静岡県から埼玉県までに至る諸遺跡が並行することを果たしてどのようにして証明したのであろうか。「様式論」に則って似ているものを並べただけの印象が強いが、似ているものが並行すること及びそれらが同一の「土器型式」に属することの先史考古学的な検証が必須なのである。

特に遺跡間の比較であれば、杉山博久氏による「特徴」のアナログ3レベル分析（「共通」、「類似を検出」、「極めて類似」）の方が遙かに真摯な対応である。このように学問的な手続きを無視し、「相違」と「類似」の関係を議論しないような遺跡の排列対応は正に石井寛氏の悪影響と言わざるを得ない。つまり、「土器型式」による組織化を捨て、大枠を決めて掛かる手続きには優れて「様式論」による混沌が見られ、神澤勇一・杉山博久両氏が「様式論」への対応から「新説小田原式」として是正した地域研究の視点が不幸にも欠落していたのである。

しかし、こうした混沌状態に対して幸いにも秩序の方向性を明確に示した研究、即ち「土器型式」の成り立ちを分析し、相互の動態を検証しようという姿勢も登場した（黒沢浩1987）。黒沢浩氏は伊勢山遺跡の土器群を考察するに当たり、「東海地方の土器型式からの系譜」と「在地の土器型式からの系譜」（但し、「在地」という意味が問題であり、「東海地方」に対する「在地」という意味合いで、埼玉県・千葉県も神奈川県にとっては「在地」としている点、即ち先史土器から地方を考察するのではなく、「関東地方」という枠組みを固定して説明している点に注意！）という仮想系譜をシミュレーションしながらも、「在地」の基盤」は課題としつつ、敢えてかつて杉原莊介氏が岩櫃山の考察で実践した（杉原莊介1967）ように東海地方と伊勢山遺跡との関係に属性分析の意義を求めた。

勿論、それ自体は黒沢浩氏にとって伊勢山遺跡の土器がどう見えるかの発想を一部の属性で表現しただけであるが、重要なのは精製土器様式による議論の展開であり、この時点では正に

厳密さの深耕（鈴木正博2001b）を問題にするよりも、石井寛氏による効率的な大量処理作業に課題を見出し、「動態論」的に分析する新たな方向に転換させた点を高く評価すべきであり、その価値は如何なる課題を導出し得たかにある。黒沢浩氏は次のように課題を明確にした。「「小田原式」は未だ学史の中で清算されていない」点、「小田原式」との関係やその終末の特定も含めて「宮ノ台式土器の概念規定もまた問題となろう」点、そして「最重要課題の一つ」として「宮ノ台式土器は決して宮ノ台式土器としてのみ存在するわけではなく、様々な要素のからみあいのなかで成立している。そのような様々な要素を他地域との併行関係を踏まえて動態論的に把握していくこと」を強調した。この視点はその前年に石川日出志氏が広域にわたる編年関係を簡潔に議論した動向（石川日出志1986）と決して無縁ではなく、石川日出志氏が「土器型式」を道具として利用し「文化動態」を語ったのに対して、黒沢浩氏は「土器型式」の実態に「生成動態」から接近したのである。この二者は山内清男氏が指示したとおり外部構造と内部構造として統合されるべきであり、そしてここまでが「小田原式」隠蔽と「小田原の土器」隠蔽の相乗効果を巡る定着に至った経緯と理解しており、黒沢浩氏の「小田原式」課題に良心を残して新たな展開へと進行することになる。

特に学問の継承という観点から、「小田原式」の隠蔽が顕著となった1980年代後半までの研究事情が明らかにした点を纏めれば、「土器型式」の理解によって立場が多様に分裂したという一点に尽きた。「土器型式」に日本先史を組織化するための「年代学的の単位」としての意味しか与えない山内清男氏による土台構築論の立場と、「土器型式」に恰も文化史（あるいは石井寛氏のように社会論的な段階付け）的な意義まで与えてしまう「様式論」による解釈論の立場に大きく代表され、特に後者は個々人の問題意識に依存するため多様となり、例えば杉原莊介氏の立場も弥生式の単純伝播を議論した「様式論」に近いことは明白である。

少なくとも私は「地方差、年代差を示す年代学的の単位」として「土器型式」を制定し、それらを組織して文化史を構成する先史考古学（山内清男氏）の立場で、例えば縄紋式晩期中葉においてさえ相模方面には異なる「土器型式」が存在することを既に導出してきた経緯（斎藤隆・鈴木正博1978）があるが、これまで見てきたように多くは「様式論」の立場で議論しており、研究が進展するにつれてより実態に合わせるべく修正している姿勢が顕著である。

それ故に「小田原式」は問題となった「小田原の土器」という実態が極めて明確であるにも拘らず、型式学研究の対象からは除外され続け、とうとう隠蔽されてしまったのである。黒沢浩氏が見せた逡巡もあるいはそこに由来している可能性があり、ここまでが「小田原式」隠蔽の定着によって暗黙のうちに進行してきた「小田原の土器」隠蔽事情である。

3. 「小田原の土器」の復権による新たなる「小田原式」隠蔽の展開

弥生式研究の先達には逐一の文献引用は省略に従うが、山内清男氏の経済史観と「年代学的の単位」としての「土器型式」、小林行雄氏の「様式論」、杉原莊介氏の「原史学」による「限定型式」があり、「小田原式」は山内清男氏が「分類の標準」として認め、杉原莊介氏も最終見解では「分類の標準」を中核とする限定性に回帰したものの粗製土器様式に拘泥してしまい、小林行雄氏は駿河地方の「様式」に含めることによって「小田原の土器」を関東地方の「土器型式」から隠蔽し、神澤勇一・杉山博久両氏は「細別」を否定した上で「様式」的扱いから相模地方における独自な「土器型式」として復活させた「新説小田原式」の学史があり、畢竟するに小林行雄氏のみが「小田原の土器」を関東地方から隠蔽したのである。

このような学史を知ってか知らずしてか、1970年代後半からの埋蔵文化財調査結果は、「分類の標準」を真摯に議論することなく、先ず東京湾東部から「宮ノ台式」への解消が宣言される（斎木 勝1978）や否や、早速東京湾西部にも瞬く間に感染した（石井寛1980）。具体的には千葉県では「小田原式」の「分類の標準」になった「千葉寺町の土器」が型式学的に議論されず、神奈川県では「小田原の土器」が隠蔽されてしまったのである。

しかし、そうした浅薄な意見に対して形態学的な手続きを重視する研究が松本完氏によって開陳された（松本完1988）。これにより「小田原の土器」が改めて復活し、その結果として「小田原式」隠蔽を新たな展開へと導くことになるのであるが、石井寛氏のドライな業務扱いに対して松本完氏は極めてウェットな研究姿勢に終始した点が対照的で面白い（業務として早く切り上げたい石井寛氏の報告書に対して、研究の展開を求める松本完氏の極めて対照的な姿勢が埋蔵文化財と考古学の違いを鮮明にしたのである）。そこで負に作用した姿勢は悩むことを免罪符としているように見えてしまう松本完氏の逡巡姿勢にあり、この反動形成が「土器型式」を列島における組織形成を目指した編年ではなく、単なる「タイムスケール」として利用する「様式」準拠姿勢（安藤広道1990 a・b）を登場させ、ここにおいて「鶴見川流域ドングリ云々」は発生時点に戻り、ドライに収斂したのであるが、モラルハザードを回避する意味でも、私は当時における免罪符（負に作用した姿勢と表現したのはその後の研究に課題の継承が見られないからである）を再確認する立場である。

即ち、「東京湾西岸地域に於いて、（中略）壺形土器を飾る櫛描文が定着する段階、特に壺形土器の櫛描文に関してはそれが言わば「貫入的」に出現、定着する段階に相当し、「内的変化」を大前提的に係類を求めることが自体に危惧を感じる。この問題は、櫛描文の成立問題に係わり、従前の「須和田式→宮ノ台式」の図式に対する疑義を含む点、簡単に解決できる問題ではない」との指摘（p.346）や、「その「宮ノ台式土器とは何か」という問い合わせを発した途端、些か複雑な問題がわき起こってくるようである。「小田原式」の問題もさることながら、「原添式」、「有東式」と呼称された東海地方東部の土器との区分の問題、混乱の坩堝と化したかに見える後期

土器の編年との接合等山積する問題は枚挙にいとまがない」との指摘（p.371）を免罪符として確認しておきたい。

前者は黒沢浩氏の立場と共通する認識であるが、違いは後者に明確で、「宮ノ台式」の生成過程については隣接土器型式との関係如何で見直すべきとの姿勢である。そして最終的な免罪符は、「用語の問題に関しては、第Ⅱ・Ⅲ次調査出土土器を含めた本遺跡出土の弥生土器のほぼ総体を、現在通用の宮ノ台式に包摂されるものとすることを以って出発点とし、そこから得られた「全体」を、大きな断絶を含まない限りに於いて宮ノ台式土器とする立場を取る。用語並びに概念の混乱、就中「小田原式」を巡る混乱を鑑るに、いづれより精確な変遷の軌跡が跡付けられ、さらに他地域、他地方との関係が整序され、時空双方に亘る明確な位置付けがなされた段階に、改めてより適確な名称が与えられるべきであると考える」（p.372）との枕詞である（尚、蛇足ではあるが、「混乱」とは山内清男氏に収斂した「小田原式」にあるのではなく、無秩序の限りを尽くした俗称「須和田式」に顕現していた事情であることは明白であり、「小田原式」如きに見られた「混乱」は可愛いほうである）。

さて、こうした免罪符を提示することによって松本完氏の折本西原遺蹟における研究が披露された訳であるが、本稿の趣旨から特記すべきは「小田原の土器」の内「分類の標準」になつた一例を広口壺形土器の変遷の中で分析の対象とした点である。その結果、松本完氏が措定する「宮ノ台式」の「最古段階」の例として三宅島坊田遺蹟が、そして「時期的に多少下って」「小田原の土器」が排列され、「小田原の土器はやはり例外的な器形と言ってよく、むしろ広口壺形土器の定着過程の一姿相とすることが出来るかもしれない」との位相を導出した。ここで問題となるのは、坊田遺蹟例と「小田原の土器」は異なった系列の土器であるにも拘らず、どのようにして比較を成したかという型式学の基本である。そしてそれは土器の形態にも関係していたが、それはさておき、こうして「小田原の土器」は分析の俎板に漸く乗ったものの、「宮ノ台式」の「最古段階」よりも新しいという見解が登場した点に注目したいのである。

この松本完氏による免罪符と「小田原の土器」の位置付けによって、本人の中のウェットな見方とドライな見方の振り子により、「小田原式」とは「宮ノ台式」の一部との見解が定着し、その後提出された石川日出志氏の編年表（石川日出志1986）が「小田原式」隠蔽を決定的にした。

では、松本完氏が復活させた「小田原の土器」の分析はその後如何なる展開を示したのであろうか。ドライな研究者が無視を決め込む中（安藤広道1990a・1990b、犬木努1992）で、黒沢浩氏が「宮ノ台式の最古段階」について安藤広道氏の編年を批判しつつ検討結果を開陳した（黒沢浩1993）。即ち、「宮ノ台式」の「第1期」は安藤広道氏の子ノ神遺蹟は「ふさわしくない」とし、坊田遺蹟の一部を当てるが、これまた「厳密な意味では宮ノ台式ではない」とする。そして「この時期に該当する資料として小田原市小田原遺跡」を位置付けた。根拠は残念ながら不明であるが、松本完氏よりは古く位置付け、しかも「厳密な意味では宮ノ台式ではない」

とする資料に敢えて比定した意図は、「小田原式」に関わる問題が脳裏にあったものと思われる。

このように個々人の問題意識は各様であるが、時代の流れとでも言うべき対応は明らかに「小田原式」隠蔽へと進んで行った、軍国主義や「藤村新一事件」の流れを思わせる正にその時に「小田原式」の原点に戻るべきと主張したのが飯塚博和氏であった（飯塚博和1993・1994）。「宮ノ台式」に編入されてしまった「小田原の土器」や東京湾東部の系統である「千葉寺町式」（鈴木正博1979）について飯塚博和氏が文様系列別の変遷過程を議論し、「宮ノ台式」以前に「小田原式」期という範疇を確認した。この議論は犬木努氏が本来扱うべき方法に基づいていたが、俗称「須和田式」に理解が及ばなかった点が犬木氏に災いした結果であろう。飯塚博和氏の議論は「小田原式」の問題を東京湾東部で展開した点に特徴と優位性があり、ここにおいて改めて「千葉寺町式」が分析の俎板に乗った。つまり、杉原莊介氏の「小田原式」は東京湾西部と東京湾東部の動向を見据えており、飯塚博和氏は東京湾東部の原点資料に対して型式学的な位置付けを行い、今日において「小田原式」期とすべき範疇を再考したのである。

そこで再注目された「千葉寺町式」は新たな展開を示すことになるが、この時期には東京湾西部を理解する上で欠かせない三宅島大里東遺蹟の報告が注目された（小林青樹ほか1995）。小林青樹氏は技法の分析から「この段階の土器群が宮ノ台式土器の範疇に含まれるのではなく、宮ノ台式直前型式として切り離して考える必要がある」との理解の下に「駿河湾東岸から相模湾西岸地域までの空白を埋める型式として仮称ではあるが「大里東式」の設定」に至った。小林青樹氏の議論の中には何故か「小田原式」も「小田原の土器」も登場しない。既に「小田原式」隠蔽を承認した上でこの議論に加えて、中核となる精製土器様式の型式学も重視していない状況に対して問題は山積みであるが、本来「大里東式」とすべき資料に対しては「宮ノ台式直前型式」の「小田原式」期（鈴木正博2000 b）と認めつつ、東京湾東岸との関係で「野沢2式」系の伴存を重視し（鈴木正博2000 a）、更に型式学的に「猪式」や「小田原の土器」と共通する文様帶が伴存する点や、「池上式」が伴存しない点も図示・解説した（鈴木正博2001 d）よう、更には「小田原の土器」の「偽流水文」と同じ櫛描手法もK-2遺物集中区で検出され、黒沢浩氏は「大里東式」よりも1時期新しいと考察している（黒沢浩1998）が、私は「小田原式」との並行関係は疑えないと判断している。

いずれにしても「小田原式」を隠蔽することによって「宮ノ台式」を拡張・拡大せざるを得なかつたわけだが、今度は「小田原式」を隠蔽したために不具合の多い「宮ノ台式」の成立過程が見直され、「宮ノ台式直前型式」という議論が復活したのである。その延長に位置付けられるのが谷口肇氏による「7期」の設定である（谷口肇1996）。俗称「須和田式」から「宮ノ台式」を観ると子ノ神遺蹟の一群は全て「7期」という「宮ノ台式直前」に納まるという結果が導出されたのであり、安藤広道氏の「宮ノ台式」概念（安藤広道1996）とは異なる理解を示した。遺蹟群研究としての立場と黒沢浩氏が示した「宮ノ台式」の「生成動態」に従えば、谷

口肇氏の見解の方が集落論的な継続性を社会論との関係で議論する際には理解し易いように思われるが、それはそれとして型式学と集落論が統合されていない現状に眞の課題を見抜く必要がある。必要なのは「タイムスケール」ではなく、型式学である。

飯塚博和氏による東京湾東部の「小田原式」研究（「宮ノ台式」成立までを仮家塚遺蹟などの特定の文様系列別に議論）と小林青樹氏の「大里東式」（「宮ノ台式直前型式」）を受けて、「それを認める認めないにかかわらず「小田原式」に拘泥する」と宣言したのは黒沢浩氏であり、「大里東式」を認めた上で「見通しとして常代・仮家塚の土器は宮ノ台式の範疇で、千葉寺町の土器は別な範疇で考えるのが適當ではないか」（黒沢浩1997）との房総における優れた立場を明確にした。

ところが早速翌年には「仮家塚の文様帶構成は池上式・中里式との間に連続的であり、そこに大里東を組み込むことは難しい。したがって、大里東が仮家塚段階をさかのぼる可能性は低いと考える。仮に、将来大里東段階の分離が可能になったとしても、それはやはり有東式－宮ノ台式の範疇で理解すべきであろう」（黒沢浩1998）と房総から暴走することになった。

勿論、暴走の原因是「御新田式」（石川日出志1996c・1997）にあり、とうとう「千葉寺町式」も隠蔽され、「御新田式」に吸収されてしまったのである（石川日出志1998）。こうして石川日出志氏は「小田原の土器」を「宮ノ台式」に、「千葉寺町式」を「御新田式」に吸収してしまい、「小田原式」研究における「分類の標準」を徹底的に解体しながら隠蔽し、最終的には「小田原式」隠蔽の廣告塔的存在になった。

さて、「「小田原式」に拘泥する」とした黒沢浩氏の予告した「別稿」（黒沢浩1993）はその後途絶えたかの印象を強くせざるを得ないほど、結果的に石川日出志氏の「小田原式」隠蔽は徹底したものになったかの感がある。最近では大島慎一氏が型式学的な根拠を一切示すことなく「小田原の土器」を「相模 I V - 2 様式」、手広八反目遺蹟第15号住居址出土土器群の段階に比定したが、どうやらその理由は安藤広道氏への依存にあるようだ（大島慎一2002）。

では、松本完氏が復活させた「小田原の土器」の分析結果は最早典型的な「宮ノ台式」として理解する以外、他に議論する余地がないのであろうか？ 「小田原式」の一系列である「千葉寺町式」も「御新田式」が原因となって生成された土器なのであろうか？ 「小田原の土器」のもう一例と「千葉寺町式」のもう一例に観る共通の性質に注目すべきであり、私には「小田原式」隠蔽は全て型式学不在と埋蔵文化財業務型マニュアル主義がもたらした学問不在の捏造行為に思えてならないのである。

そこで「小田原式」隠蔽の風潮に対して、改めて「小田原の土器」に学ぶ立場から東部弥生式研究の土台を確認し、「小田原式」の意義を議論したい。

4. 「小田原の土器」研究法と「小田原式」の復権

戦前と近年の対比で見るならば（錯綜した見解ながらも、現時点で「小田原式」継承者は杉原莊介氏と山内清男氏の学門を継承している者のみであり、昨年無念にも私と同期の飯塚博和氏が鬼籍に入られてしまった）、最近の潮流は無意識のうちに「様式論」に駆逐されているよう見える。特に埋蔵文化財業務にとっては「小田原式」とは如何様に取り扱われても仕方が無い（考えるだけ面倒で熟考する時間が創出できない）存在であり、触れる意味すらないかの如くである。

しかし、理論に長じた山内清男氏、及び直感と意欲に長けた杉原莊介氏の「小田原式」研究に学ぶことは微塵も無いのであろうか。寧ろ、「小田原式」に学ぶところから新たな道が開けるような、学問の独創性の本質に触れられるような気がしてならないのである。

そこで本章では「小田原式」に学ぶと如何なる展望が開けるかを議論する。特に「小田原式」研究において隠蔽された方法、即ち「分類の標準」に徹した山内清男氏による方法について議論を展開するが、それは弥生式研究では東京考古学会のプロパガンダにより隠蔽され続けてきたからである。

東京考古学会との確執により『日本先史土器図譜』（以下『図譜』と略）は北関東弥生式の後半と前半を代表する「十王台式」と「野沢式」から刊行された（山内清男1939、鈴木正博1999c）。更に昭和14年に刊行が遅れた『弥生式土器集成図録 正編解説』（以下『正編解説』と略）の「様式論」に反論する目的で、南関東を中心として北関東を補いつつ、「特に変った弥生式」（山内清男1940）として「土器型式」を制定し、「分類の標準」を示した。「様式論」と「分類の標準」の具体的な違いは詳細にわたり解説してある（鈴木正博1999b）ので本稿では省略に従う。

「土器型式」の在り方については、「野沢式」では「縄紋式の伝統に富む」弥生式で、かつ東北地方や中部地方との広域にわたる連絡・交渉が指摘され、「様式論」のような単純な類似関係では理解できない点を明確にし、「特に変った弥生式」では「様式論」の単純伝播論による理解を否定し、関東地方には「在地化基盤」を異にする多くの「土器型式」が並存している状況を象徴化した。「野沢式」では「土器型式」の成立構造を、「特に変った弥生式」では地方の斑状構造を明らかにする接近法を開陳したのである。

その中で「小田原式」には抜きん出て先進的な方法が示されたのであるが、先ずはその認識を共有するところからはじめる必要がありそうだ。それは「十王台式」や「野沢式」、あるいはそれ以外の「特に変った弥生式」では使用されず、「小田原式」にのみ使用された概念であり、「頸から体上部は文様帶となって居る」との解説文に見られるとおり、弥生式において縄紋の施文されない「文様帶」が特定され、しかもそれが他の弥生式の「分類の標準」では使用されないという指示に注目しなければならない。

そこで「小田原の土器」を「文様帶」として理解する方法が必要になる。これは「様式論」で安易に「駿河湾地方」に裁断された点に対する方法的批判を「文様帶」という用語で指示していたのであり、東京考古学会の櫛描文による単純伝播論思想を危惧し、「文様帶」の特定に着目し、成立基盤に対する眞の議論を提案したものであった。この時点で参考になるのは『正編解説』の図録であり、私には隣接している駿河湾地方や伊勢湾地方の文様構成ではないと考察した。獨得の形態と「文様帶」の由来を改めて議論するのが筋である。

加えて「文様帶」としてみる場合に更に重要な属性があり、「文様帶」よりも上位に位置付けられる属性が杉原莊介氏も拘った「宮ノ台式」の「施朱様式」であり、その成立基盤を型式学的に展望した結果、中部地方南部の「阿島式」から東京湾へと受容されたものと考察した(鈴木正博2000b)。その後早速、「嶺田式土器の赤彩様式が白岩式土器に引き継がれ、それが南関東の宮ノ台式土器に至る赤彩壺の基盤となった点にも注目しておきたい」(安藤広道2002)という応答が見られたのは、今後の「嶺田式」から「白岩式」成立に掛けての議論に重要である。

「施朱様式」の系統はさて置き、第1図1は『図譜』で指示された「小田原式」である。この文様帶の構造は既に詳細にわたり解説した(鈴木正博2001b)通り、「小田原型文様帶」と特定できる性質で、その概念は『正編解説』で示されたもう一例の「小田原の土器」の拓影にも共通していることを検証した。共に縄紋が関与しない点が「文様帶」の特定に重要なのであり、そこで前述の如く『図譜』「文様帶」の由来を真摯に議論する必要がある。



第1図 「小田原式土器」の「文様帶」

この問題には中里遺蹟で顯著になった遠隔地との連絡・交渉関係(杉山浩平1998、石川日出志2001)が拍車を掛けたのであり、本来は全体の関係を分析すべく報告書の刊行を俟ってから「宮ノ台式」以前の特徴に由来することを議論する予定でいた。それが「中里式→小田原式」の意味であり、そうした結果に基づいて「小田原型文様帶」から「宮ノ台式」の「文様帶」が生成できることを示したのであるが、早速安藤広道氏の目に留まり、「小田原型文様帶」の由来を「宮ノ台式」の中に求める従来型の理解(「小田原型文様帶」概念の拡張)が改めて強力に提示された(安藤広道2002)。

安藤広道氏の議論は私が次に明らかにすべき在地系列の課題にまで踏み込んでいる点で、根拠とすべき編年と系列間の「複合」が分析されておらず、先走った議論と熟練に対する不安と発散を読み取っているが、確認すべきは、私が整備したのは「小田原型文様帶」の特定のみであって、それ以外の系列の「文様帶」は「王子ノ台式→砂田台式→子ノ神式」として「在地化

基盤」を明確にし、「中里式→小田原式」とは異なる並行系列と理解している点である。従って、「磨消繩文」という在地の施文手法の連續性からみて、櫛描文+磨消繩文の文様に先んじて「小田原型文様帶」が成立していたとは考えがたい」との単純進化論は考えがたく、そこに『図譜』例の由来を見抜く必要があったのである。

こうした見解を導いた安藤広道氏の議論には根本的に問題と思われる対応が2点ある。即ち、1点は「小田原型文様帶」の定義を正確に適用しなかった点であり、それゆえに原型と変遷の分析が発散してしまったのである。2点目はその由来を非繩紋という同じ性格の文様構成に追及しなかった点であり、「中里式→小田原式」の独立性を生成した非繩紋の系統として「海」を鍵語とした遠隔地環境との関係性が措定されていたのである。

さて、杉山浩平氏の紹介と石川日出志氏による「中里式」の新展開以来、私が改めて問題にし、具体的に「中里式」理解で石川日出志氏や安藤広道氏と中里遺蹟現地説明会や関東弥生研の中里遺蹟資料検討会で議論したのは、遠隔地土器群「貫入」実態とその変容レベルの分析方法と総合方法である。中里遺蹟の分析が出来ない現状での議論は大変心許ない限りであるが、『図譜』の「文様帶」の由来を私がどのように措定して検討していたのか、その視点だけは開陳しておく必要がある。

第1図2は兵庫県田能遺蹟（村川行弘ほか1977）の櫛描文壺である。肩部から胴部上半にかけて櫛描による流水文と竹管による幾何学文という2種の原体による文様を2段構成で充填させる特徴を有しており、『正編解説』の図録に比して特徴がより特定できる例である。形態は『正編解説』に共通する例があるものの、「文様帶」の性質を議論する場合には田能遺蹟例が便利である。『図譜』例の個々の文様レベル、例えば、口唇部の繩紋や「偽流水文」の手法、あるいは最下段の充填三角文は全て在地周辺に限定できる文様であり、山内清男氏が取り立てて文様の特定を問題にしなかった理由は正にその点にあるものと推察している。即ち、技法を超えた次元で「文様帶」と対峙していたのであり、「小田原型文様帶」の原型を同じ『正編解説』の図録の参照に従って、「様式論」による位置付けとは異なる交渉・連絡を見抜く方法を提示したのであった。尚、杉山浩平氏による中里遺蹟の紹介直後、私は田能遺蹟の資料を皮切りに神戸市までではあるが、遠隔地土器群の雰囲気を実感し、「小田原式」では何故「文様帶」としたのか、その意味が確認できた。「文様帶は文様帶から」との教えであったが、それが「小田原型文様帶」と命名した意味でもある。

次は年代の特定に影響を及ぼすと取り沙汰されている「偽流水文」について触れておきたい。既に大里東遺蹟K-2遺物集中区から出土していることは触れておいたが、第2図に文様に特徴のある精製土器様式を示した。第2図3~7が櫛描文系「偽流水文」の壺で、3・6によって縦位方向は交互に「反弧文スリット」を展開していることが分かる。7には最下段の文様があり、刺突列による境界以下を連弧文としている。伴存している磨消繩紋は14~18を見る限り、頸から胴部にかけて空白部の少ない曲線文を展開しており、「宮ノ台式」直前の「小田原式」

期に例の多いものである。10・12も
そうした時期に見ることができる。

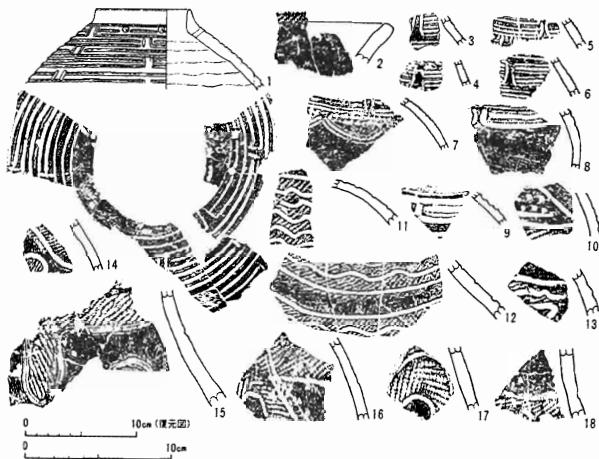
重要なのは1・8・9の沈線文系
「偽流水文」である。1の短頸壺は
第1図1と同様に二つ一组の穴があ
り、短頸の外反が異なるものの、共
通した形態にも注意したいと思う。
問題は沈線文系「偽流水文」の系統
で、黒沢浩氏の「擬似流水文B」(黒
沢浩1987)とは明らかに異なる系統
である。「流水文」からの系譜を引
く櫛描文系「偽流水文」は「反弧文
スリット」のように、単位文様を作

出させる手法というよりも、縦位のスリット構成に意味を持たせているように考察しており、
そうした意味で1・8・9を沈線文系「偽流水文」と呼んだのである。更に吟味すべきは櫛描
文系「偽流水文」と沈線文系「偽流水文」の関係であり、共振構造における二者と措定してお
きたいと思う。

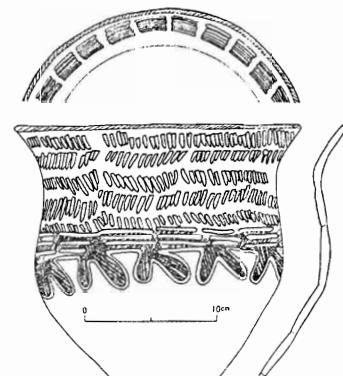
その根拠として提示したのが第3図の「牛石型文様帶」(鈴木正博2003a)における境界部
の沈線文の性格である。この文様は口縁内面の櫛描文を沈線文で模倣したものであり、櫛描
文系と沈線文系が同時と考える根拠になり、「偽流水文」
においてもその蓋然性は高まったのである。

とすれば、「擬似流水文B」以前に別な「偽流水文」
が形成されている可能性が高く、安藤広道氏が「初期の
ものは、櫛の一本一本と」(部分に同一の施文具を用い
た太く大柄のものが一般的)(安藤広道2002)として、
櫛描文系の「小田原の土器」がより新しくあるべきとす
る裁断はあまりにも単純な図式で「様式論」に犯された
結果である。「文様は文様から」由来を検討すべきで、
型に嵌まった図式でマニュアル的に判断を下すべきでは
ない。

このように「土器DNA関係基盤」に立つならば、「小田原の土器」の「文様帶」が原型を
「在地化基盤」には求められず、かつ文様が「在地化基盤」に従っている以上、「小田原型文
様帶」自体を変遷の初期状態とするのが正道であり、それ以降は2段構成が多段化したり、ま
たは充填構成から中央分離帯を挟むように充填度を弛緩したり、あるいは肩部から胴部上半に



第2図 大里遺跡K-2遺物集中区出土土器



第3図 「牛石型文様帶」

掛けての広い範囲にわたる施文帯から肩部のみに縮小したり、と様々な変遷を辿っている。こうして安藤広道氏の見解とは大きく異なる変遷列が推定されるのであるが、俗称「宮ノ台式」の議論は本稿の趣旨とは異なるので、機会を得て詳述することとし、これ以上は深入りしないでおきたい。

『図譜』以外の「小田原の土器」についても多少触れておきたい。第4図1がそれであるが、「小田原式」の型式学が展開されなければ、「宮ノ台式愛名鳥山系列」(第4図2)の重要性には気がつかないであろう。最近実測図が公表され(杉山浩平2003)、多くの研究者によって見直される機運が乗じてきたのは喜ばしく、折角の機運でもあるので、愛名鳥山遺跡の資料について兼ねてより

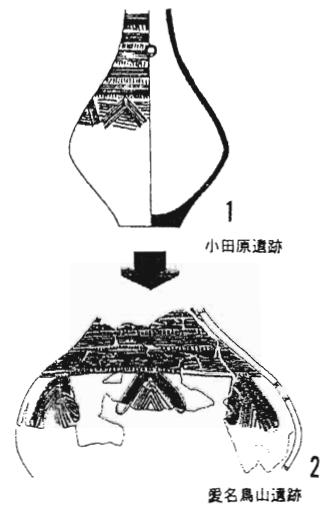
気についている点について「小田原式」との関連で課題を明確にしておきたい。

第5図はA地点2号住居址出土土器群である。実測図のA21・A22(手広八反目遺跡第15号住居址出土土器群よりは古式の「宮ノ台式」)と拓影資料A21~A24とは出土状況が全く異なり、別に考えるべき纏まりである。拓影資料A21・A23・A24は磨消繩紋が発達する壺である。「宮ノ台式愛名鳥山系列」より古式の「文様帶」で、「子ノ神式」の磨消繩紋と共通した特徴である。これに拓影資料A22の「小田原型文様帶」が併存するものと思われ、「小田原式」期の土器群と推定している。この直後の土器が実測図のA21・A22であり、A21のような胴部最大径部を最下段とする文様に相模方面の特徴が認められる。

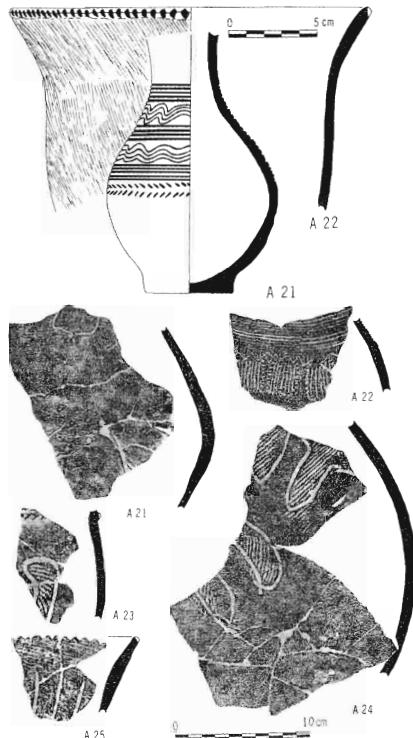
第6図はB地点2号住居址出土土器で「宮ノ台式愛名鳥山系列」とした階段の資料である。「擬似流水文B」がB21とB24に認められており、小田原市山ノ神遺跡で纏る例も含めて、「宮ノ台式」の最古の階段に定着していることが分かるのである。よく引き合いに出される坊田遺跡(橋口尚武ほか1983)では櫛描文系「偽流水文」とともに「擬似流水文B」も生成されているので、他に見られる類型を異にした櫛描文と併せて理解を深める必要がある。注目すべきはB23の深鉢文様帶であり、山寄りの厚木市遺跡を考える際には「牛石型文様帶」を継承している点は重要であろう。

ここで「文様帶」を志向した研究動向について見ると、松本完氏の小林行雄氏と似たような認識に始まり、犬木努氏が説明のための便法として施文帯という概念で繩紋式との連続性を断ち切り、黒沢浩氏が「栗林式」研究の動向も踏まえて全面的に採用・推進し、それを受け更に活発化した経緯がある(安藤広道1999、石川日出志氏2002)ように、今後の「小田原式」研究には山内清男氏の指示通り、必須の接近法であることが理解されよう。

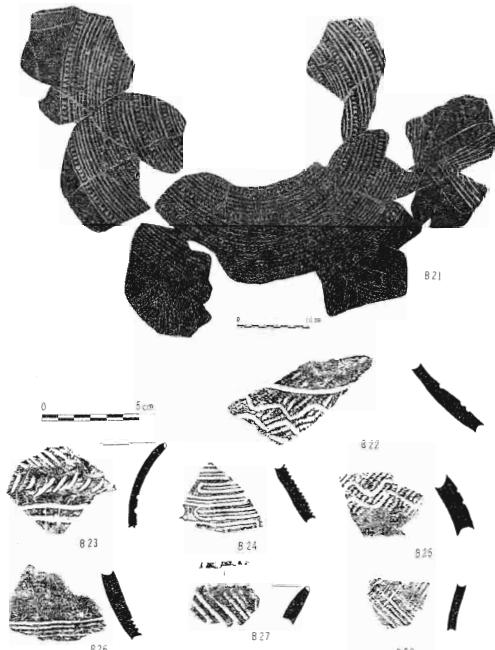
さて、約束の紙数も尽きてしまい、神奈川方面以外の資料には殆ど触れることができなかっ



第4図 杉山浩平氏の変遷図



第5図 愛名鳥山遺蹟A地点2号住居址出土土器



第6図 愛名鳥山遺蹟B地点2号住居址出土土器

たが、簡単に纏めるならば、「小田原式」研究は学史的な「小田原の土器」と「千葉寺町式」によって櫛描文系列の「文様帶」を特定し、「千葉寺町式」の「文様帶」が縄紋と併用され新たに形成されたのが「真の御新田式」であった(鈴木正博1999a・2001c)。これに「野沢式」や「飛鳥山式」等で注意された筒形土器の「文様帶」研究もより広くより深く進展するに及び(石川日出志2003、鈴木正博2002a・2002b)、更には東部関東の「磨消渦文系統論」(鈴木正博2003b)と「複合」することも可能となり、「小田原式」期の関東は「特に変った弥生式」で組織し得る展開が顕著となったのである。ここにおいて改めて『図譜』による「分類の標準」の重要性を思い知らされることになり、訳の分からぬ大枠とか「様式論」による先史土器の解釈を行う前に科学的に検証できる「年代学的の単位」という土台を構築し、その方法を継承し、駆使することが「小田原式」研究の本来的意義と今後の展望なのである。

5. 結語—「小田原式」研究の今日的意義—

「小田原式」とは戦前に注目された「小田原の土器」によって方法検証の事例として着目され、戦後の高度経済成長時代の埋蔵文化財調査の中で隠蔽された「土器型式」である。つまり、

研究方法として議論が展開し、具体的に多様な結果を導出し、それへの対峙が研究目的と研究方法を磨いてきた経緯があったにも拘らず、埋蔵文化財調査の進行によって先史考古学の方法を検証する学問の基盤に関わる研究プロセスが無視される風潮が助長した。学問の土台構築と研究の進展（即ち知識の蓄積）ではなく、業務の効率化（即ち知識の消費）が目的と化し、その結果、「小田原式」研究の意義が捏造され、具体的には接近することによって混乱が一層甚だしくなるかのように捏造・吹聴され、昭和14年の小林行雄氏と昭和15年の山内清男氏による方法的切磋琢磨を抹殺し、最終的には「小田原式」を隠蔽することで研究の進展が図られるかのように捏造・誤解されてきたのである。

そこで「藤村新一事件」の教訓から反省すべきは、戦後の高度経済成長時代の隠蔽プロパガンダによる構造的思考停止状態からの抜本的な解放であり、「小田原式」研究を原点に戻すことにより、再度先史考古学の方法を具体的な資料に基づいて再検証する意識改革と実践を促すことにはかならないのである。

その点で飯塚博和氏による「小田原式再考」は重要な問題提起であり、俗称「須和田式」の研究進展状況から観て正に時宜な対応であった。これは杉原莊介氏の櫛目文単純伝播論への批判が高じる中で、「土器型式」の「在地化基盤」を特に重視した実践であり、黒沢浩氏による「在地」概念をより厳密な文様系列の展開へと導き、複数の文様系列別により深い変遷プロセスを検討した点に、「小田原式」研究においては珍しく素直に「土器型式」研究としての展望を見出した仕事であった。ここに故人のご冥福を謹んでお祈りする次第である。

「小田原式」研究とは、「小田原式」研究の意義が理解されるまでに弥生式研究の深耕・進展が見られてはじめて重要性が前向きに議論でき、その真相と方法を含めた先史考古学的展望に意義が見出せるのである。これは『図譜』の「特に変った弥生式」が「土器DNA関係基盤」に根差した接近法であることに人類史的意義があり、特異ゆえに分析を怠ったり、マイナーゆえに無視したりする研究姿勢を、非科学的で型式学不在として痛烈に批判したものである。

層位などのイベント情報を用いて遺蹟内の局所最適化に当座の目的を設定し、「タイムスケール」として土器を排列する作業は決して否定しないが、型式学研究とはそこから始まる本質への接近である。手続き的には個々の來し方行く末の検証を行い、集団の「複合」状態を確認し、人類史として総合可能な「土器型式」を組織する手掛かりを見出し、編年としての全体最適化に向けて試行錯誤するという、本来の先史考古学研究目的に接近し、及びそこから集落の成立や展開、そして遺蹟群研究における「土器社会論」の議論を可能にするのが、「小田原式」研究の方法であり、今日的意義であると展望した。そしてそれは畢竟、戦前の到達点に過ぎなかったのである。そして戦後の資料は「文様帶」により再構成すべきであり、別稿を予定している。

隠蔽する心よりも学ぶ心によって山内清男氏の学史的な論点に接近可能な構えで、隠蔽された「小田原式」研究と対峙すると、当たり前ではあるが「藤村新一事件」は考古学に関わる者

にとって決して他人事であってはならないことと痛感せざるを得ない。そして戦後、特に高度経済成長期における先史考古学の脆弱性を徹底的に反省し、再構築の強い意志と継続的な実践に着手しない限り、時代の潮流と同期し迎合された「藤村新一事件」を学問として乗り越えることは絶対に不可能であるとの決意に達着する。「小田原式」研究を通して捏造の温床が極めて考古学的であることを認識し、「藤村新一事件」成立事情が決して特殊でなく、我々の日常茶飯事の意識であることを実感してしまった点は極めて残念であったが、幸いにも戦前までの学史は尚記憶と記録の範囲内にあり、再認識と再検証による再出発は可能であると思量する。管見ゆえの誤解はご叱正頂ければ幸いである。

引用文献

- 安藤 広道 1990 a 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式の細分（上）—遺跡群研究のためのタイムスケールの整理—」『古代文化』第42巻第6号、（財）古代学協会
- 安藤 広道 1990 b 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式の細分（下）—遺跡群研究のためのタイムスケールの整理—」『古代文化』第42巻第7号、（財）古代学協会
- 安藤 広道 1996 「南関東地方（中期後半・後期）」『Y A Y !—弥生土器を語る会20回到達記念論文集—』、
弥生土器を語る会
- 安藤 広道 1999 「「栗林式土器」の成立をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』92号、長野県考古学会
- 安藤 広道 2002 「静岡県沼津市東椎路久保出土の弥生土器について」『民族考古』第6号、慶應義塾大学『民族考古』編集委員会
- 飯塚 博和 1982 『遺跡調査会報告第1冊 千葉県野田市半貝・倉ノ橋・勢至久保』、野田市遺跡調査会
- 飯塚 博和 1993 「小田原式土器再考」『異貌』第13号、共同体研究会
- 飯塚 博和 1994 「小田原式土器再考（続）」『異貌』第14号、共同体研究会
- 石井 寛 1980 『折本西原遺跡』、横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石川 日出志 1986 「中部・関東の弥生時代中期をめぐる諸問題」『第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』、北武藏古代文化研究会・千曲川水系古文化研究所・群馬県考古学談話会
- 石川 日出志 1996 a 「須和田式土器」『日本土器事典』、雄山閣出版
- 石川 日出志 1996 b 「小田原式土器」『日本土器事典』、雄山閣出版
- 石川 日出志 1996 c 「東日本弥生中期広域編年の概略」『Y A Y !—弥生土器を語る会20回到達記念論文集—』、
弥生土器を語る会
- 石川 日出志 1997 「御新田式土器をめぐって」『シンポジウム南関東の弥生土器』、
弥生土器を語る会・埼玉弥生土器観会
- 石川 日出志 1998 「弥生時代中期関東の4地域の併存」『駿台史学』第102号、駿台史学会
- 石川 日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号、駿台史学会
- 石川 日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100号、長野県考古学会
- 石川 日出志 2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号、土曜考古学研究会
- 伊丹 徹 1990 「様式論と関東」『神奈川考古』第26号、神奈川考古学同人会

- 犬木 努 1992 「宮ノ台式土器基礎考—施文帶の検討を中心として—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第11号、東京大学文学部考古学研究室
- 大島 慎一 1983 「南関東地方の弥生中期編年研究について—王子台遺跡を中心に—」『東海史学』第18号、東海大学文学部
- 大島 慎一 2002 「第ⅠⅤ様式」『弥生土器の様式と編年—東海編—』、木耳社
- 大塚 達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』、同成社
- 大塚 初重 1965 「東京都三宅島ボウタ遺跡の調査」『考古学集刊』第3巻第1号、東京考古学会
- 岡本 東三 2003 「多岐亡羊の縄紋文化起源論」『季刊 考古学』第83号、雄山閣
- 神澤 勇一 1968 「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」『神奈川県立博物館研究報告』第1巻第1号、神奈川県立博物館
- 黒沢 浩 1987 「神奈川県伊勢山遺跡出土の弥生式土器」『明治大学博物館 館報』No.3、明治大学考古学博物館
- 黒沢 浩 1993 「宮ノ台式土器の成立—東海地方の櫛描文土器群の動向から—」『駿台史学』第89号、駿台史学会
- 黒沢 浩 1997 「房総宮ノ台式土器考—房総における宮ノ台式土器の枠組み—」『史館』第29号、史館同人
- 黒沢 浩 1998 「続・房総宮ノ台式土器考—房総最古の宮ノ台式土器—」『史館』第30号、史館同人
- 紅村 弘 2003 「加生沢遺跡の新資料2点と最近の問題点」『古代人』63、名古屋考古学会
- 小林 青樹ほか 1995 『東京都三宅村 大里東遺跡発掘調査報告書』、大里東遺跡発掘調査団
- 小林 行雄 1939 『弥生式土器集成図録 正編解説 1938 東京考古学会学報第1冊』、東京考古学会
- 斎木 勝 1978 「第Ⅳ章 東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器」『研究紀要3 一考古学から見た房総文化— 3 弥生時代』、千葉県文化財センター
- 斎藤 隆・鈴木 正博 1978 「千葉県多古町桜宮遺跡の土器について」『古代文化』第30巻第10号、(財)古代学協会
- 杉原 荘介 1936 a 「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」『人類学雑誌』51-1、日本人類学会
- 杉原 荘介 1936 b 「相模小田原出土の弥生式土器に就いての補遺」『人類学雑誌』51-4、日本人類学会
- 杉原 荘介 1967 「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」『考古学集刊』第3巻第4号、東京考古学会
- 杉原 荘介 1968 「南関東地方」『弥生式土器集成本編2』、東京堂出版
- 杉原 荘介 1977 「須和田式土器の細分について」『わかしお 若潮会連絡誌』No.1、若潮会
- 杉原 荘介 1981 『明治大学文学部研究報告 考古学第8冊 栃木県出原における弥生時代の再葬墓群』、明治大学文学部
- 杉山 浩平 1998 「小田原市中里遺跡の弥生土器から」『史峰』第24号、新進考古学同人会
- 杉山 浩平 2003 「愛名鳥山遺跡出土土器の再検討」『西相模考古』第12号、西相模考古学研究会
- 杉山 博久 1970 a 「2.付編 山ノ神遺跡周辺の弥生中期の遺跡とその出土資料」『小田原市文化財調査報告書』第3集、小田原市教育委員会
- 杉山 博久 1970 b 「1.小田原市山ノ神遺跡発掘調査報告」『小田原市文化財調査報告書』第3集、小田原市教育委員会
- 杉山 博久 1974 『愛名鳥山』、愛名鳥山遺跡発掘調査会
- 杉山 博久 1996 「お目に掛りましたかったです 山内清男先生」『画竜点睛—山内清男先生没後25年記念論集一』、山内清男先生没後25年記念論集刊行会

- 鈴木 正博 1978 「「赤浜」覚書」『常総地』9、常総台地研究会
- 鈴木 正博 1979 a 「特別寄稿 高野寺畠の弥生式土器について」『高野寺畠遺跡発掘調査報告書』、茨城県勝田市教育委員会・高野寺畠遺跡調査会
- 鈴木 正博 1979 b 「「十王台式」理解のために (3) 一分布圏南部地域の環境 (上) 一」『常総地』10、常総台地研究会
- 鈴木 正博 1982 「「出流原」抄」『利根川』3、利根川同人
- 鈴木 正博 1984 「「王子台」の頃」『利根川』5、利根川同人
- 鈴木 正博 1985 「関東地方 (当日配布資料)」『<条痕文系土器文化>をめぐる諸問題』、愛知県考古学談話会
- 鈴木 正博 1997 「1996年の考古学界の動向 繩紋時代 (関東・中部)」『月刊 考古学ジャーナル』423、ニューサイエンス社
- 鈴木 正博 1999 a 「栃木「先史土器」研究の課題 (3) 一「宮ノ台式縁辺文化」としての「富士前式」制定とその意義一」『婆良岐考古』第21号、婆良岐考古同人会
- 鈴木 正博 1999 b 「「十王台式」研究法から観た南関東弥生式 (序説) 一「縩紋原体論」と「施文帶」による「宮ノ台式縁辺文化」への接近一」『茨城県考古学協会誌』第11号、茨城県考古学協会
- 鈴木 正博 1999 c 「北関東弥生式後期「二軒屋式」の研究—「二軒屋式」制定60年の清算と「土器型式」研究の再構築—」『日本考古学協会第65回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
- 鈴木 正博 2000 a 「木戸口貝塚論序説—東京湾東岸における大型ハマグリ・マガキ主体「宮ノ台式」直前期弥生式貝塚の形成—」『利根川』21、利根川同人
- 鈴木 正博 2000 b 「「宮ノ台式」成立基盤の再吟味—北方文化論的視点から観た「宮ノ台式」在地化基盤と進行濃度—」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
- 鈴木 正博 2001 a 「「王子台」の頃、そして「王子ノ台」から—相模弥生式中期中葉における「土器DNA関係基盤」の構築—」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
- 鈴木 正博 2001 b 「「小田原式」研究序説—「十王台式」研究法である「土器DNA関係基盤」から観た「小田原式」の真相—」『茨城県考古学協会誌』第13号、茨城県考古学協会
- 鈴木 正博 2001 c 「「弥生式中期「雲間式」と「富士前式」の間—「十王台式」研究法から観た真の「御新田式」、及び「宮ノ台式縁辺文化」における進行濃度の実態—」『栃木県考古学会誌』第22号、栃木県考古学会
- 鈴木 正博 2001 d 「貝田町ばくり事件は迷宮入りか、それとも型式学の復権は可能か!—埼玉土器観会「秩父」の論点は「中里式」概念を止揚する!—」『関東弥生研究会 第1回研究発表資料』、関東弥生研究会
- 鈴木 正博 2002 a 「「白倉」と「関所裏」の筒形土器に観る型式学的引力」『群馬考古学手帳』、群馬土器観会
- 鈴木 正博 2002 b 「関東弥生式中期中葉の突起文と筒形土器の型式学—「様式論」では接近不能な「特に変った弥生式」と「土器DNA関係基盤」—」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
- 鈴木 正博 2003 a 「「脱条痕文縁辺文化」研究序説—弥生式「zigzag 文様帶系土器群」と「脱条痕文」に観る相互作用と「共同の母体」観—」『婆良岐考古』第25号、婆良岐考古同人会
- 鈴木 正博 2003 b 「「野沢2式」研究序説—「磨消渦文系統論」への新たなる接近—」『栃木県考古学

会誌』第24集、栃木県考古学会

- 鈴木 正博・鈴木 加津子 1980 「「女方文化」研究（1）—平沢式の東進・北上について—」『第4回茨城県考古学協会研究発表要旨』、茨城県考古学協会
- 関根 孝夫 1982 「神奈川県王子台遺跡」『日本考古学年報』32、日本考古学協会
- 関 義則 1983 「須和田式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10、埼玉県立博物館
- 谷口 肇 1996 「神奈川県地域（弥生前期～中期中葉）」『Y A Y !—弥生土器を語る会20回到達記念論文集一』、弥生土器を語る会
- 中島 宏 1982 「熊谷市池上遺跡発掘調査概報」『資料館報』N O.13、埼玉県立さきたま資料館
- 中村 五郎 1972 「野沢1式土器の類例とその時代」『小田原考古学研究会会報』第6号、小田原考古学研究会
- 橋口 尚武ほか 1983 『東京都埋蔵文化財調査報告 第10集 三宅島坊田遺跡』、東京都教育委員会
- 星田 亨二 1976 「東日本弥生時代初頭の土器と墓制—再葬墓の研究—」『史館』7、史館同人
- 松本 完 1988 「第9章 折本西原遺跡の弥生集落—第Ⅰ次調査の成果と問題点—」『折本西原遺跡－I 横浜市都市計画道路新横浜元石川線折本地区埋蔵文化財発掘調査報告書』、折本西原遺跡調査団
- 村川 行弘ほか 1977 『田能遺跡概報』、兵庫県社会文化協会
- 山内 清男 1936 a 「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』第1巻第4号（山内清男・先史考古学論文集・第三冊1967所収）
- 山内 清男 1936 b 「考古学の正道」『ミネルヴァ』第1巻第6～7号（山内清男・先史考古学論文集・第三冊1967所収）
- 山内 清男 1939 「第一部 関東地方 第一輯 十王台式 野沢式」『日本先史土器図譜』、先史考古学会（山内清男・先史考古学論文集・第六～十冊1967所収）
- 山内 清男 1940 「第一部 関東地方 第五輯 弥生式」『日本先史土器図譜』、先史考古学会（山内清男・先史考古学論文集・第六～十冊1967所収）